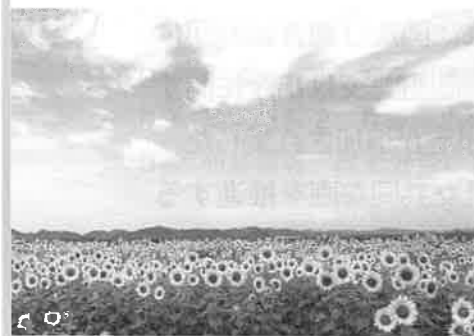


多様な人材が活躍するまちづくりをめざして



おのし 兵庫県小野市議会

2

「男女共同参画社会基本法」が制定された1999年に、「小野市はーと・シップ（男女共同参画）社会推進条例」を制定した小野市。その後、4年に1度開催される「女性議会」や「おのウィメンズチャレンジ塾」などの実施を通して女性議員を増やしてきた。本稿では、自身も「女性議会」等をきっかけに議員を志したという副議長の河島三奈氏から、小野市のこれまでの施策の効果と今後の目標について、詳細に報告する。 詳細は本文 P32～35 にて



写真中、中左、下：小野市議会事務局提供
写真上左：「ひまわりの丘公園」小野市観光協会提供



女性議員5割超えへ — 大磯町議会の歩み



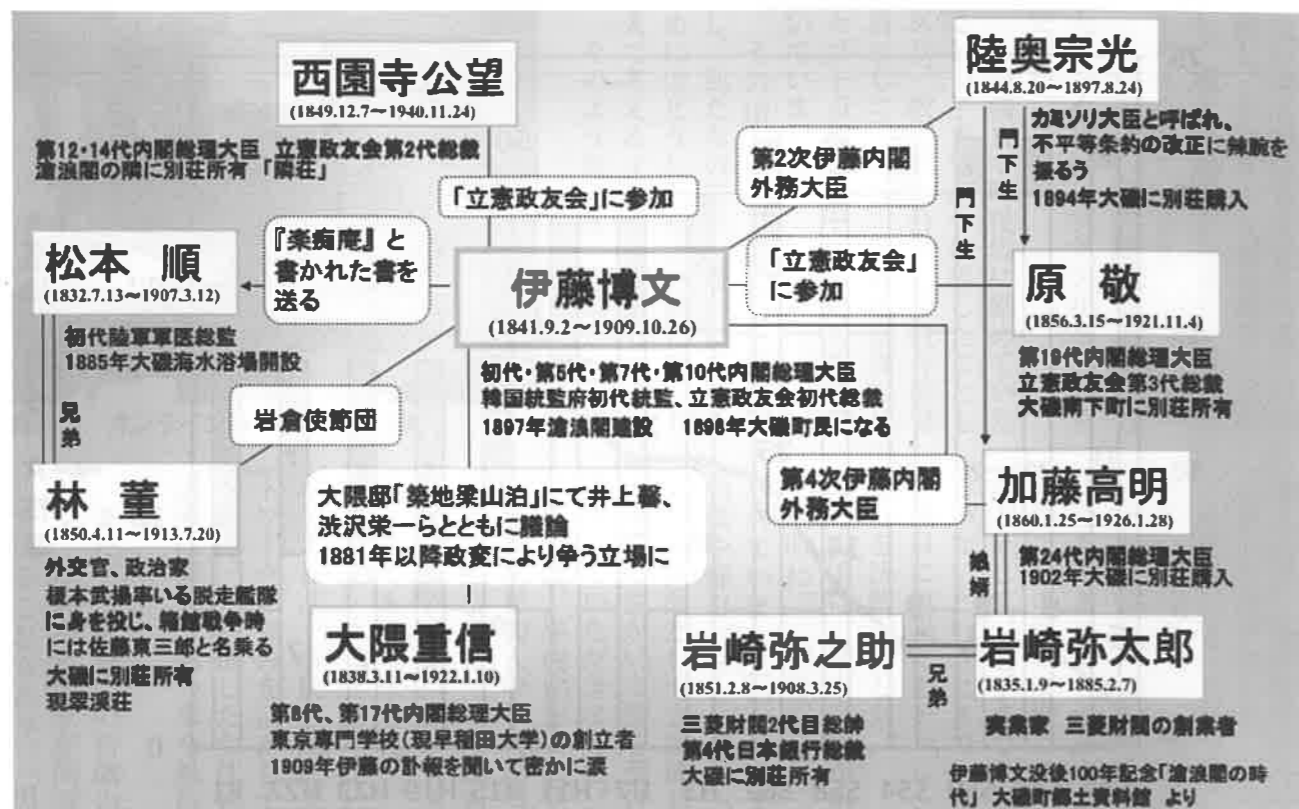
おおいそまち 神奈川県大磯町議会

1

大磯町議会では、1967年に初めての女性議員が誕生して以降、女性議員数は徐々に増え続けた。1991年は全議員数の25%の割合となり、そして2003年には50%に達した。以降はその数値が継続されている。本稿では同議会の取組みと成果を出し続ける要因について、自らも女性議員で議長を務める竹内恵美子氏が詳細に報告する。 詳細は本文 P28～31 にて

写真はすべて大磯町議会事務局提供／写真中左：旧大隈重信邸等を含む「明治記念大磯邸園」





資料1 明治政界の奥座敷 (相関図)

ルテレビにて本会議生中継と再放送を開始。平成17年(2005)、議会議選出の委員会等委員(充て職)の原則廃止、一般質問の質問回数制限を撤廃。平成19年(2007)、会議録検索システムの導入。公開、議員定数の削減、一般質問の一問一答方式の導入。平成20年(2008)、常任委員会等の会議録の公開、本会議動画(DVD)の貸し出し。平成21年(2009)、議会基本条例の施行。平成23年(2011)、議案説明等にスライド映写導入(パワーポイント)。平成24年(2012)、決算審議に総括質疑を導入。平成25年(2013)、議案審議に一問一答方式を導入。平成26年(2014)、議員提案による「大磯町省エネルギー及び再生エネルギー利用の促進に関する条例」を制定。平成29年(2017)、一般質問にスライド映写導入(パワーポイント)。令和3年(2021)、議会報告会にオンライン(Zoom)を導入(資料3)、議案審議を回数制から時間制に改定。このように、男女や年齢に関係なく多様な視点から積極的に提案し改革を進めてきました。定例会ごとに実施している一般質問は、議長を除く13人の議員中、毎回10〜13人の議員が町政を

質しています。一般質問は通告制のため、事前に答弁調整した原稿により町長、教育長が答弁します。しかし、再質問以降は原稿なし。その場での勝負。当町議会では、準備された質疑・原稿を淡々と朗読し合う姿はほとんど皆無で、町職員の答弁力はもろろんのこと、議員の質問力が求められ、緊張感を持った中での質疑となっています。また、議員だれもが自由闊達に発言できる雰囲気があるため、良し悪しは別として、会議時間も長く、9時から17時の定められた会議時間の延長も珍しいことではなく、議論が深められています。一般的に言い方として、「女性の持つきめ細やかな視点、気づき」と言われることがあります。私が、私は男女、年齢の他、人それぞれを持つ個性、多種多様な視点で議会運営に活かされているのだと思っています。「女性だから細かいことに気づく」とか、「男性だから大きな視野を持つて考える」とか、固定観念で議論するのではなく、各個人の多様な視点で深い議論に繋がっている議会だと感じています。だからこそ、各議員の個性的な

現地報告

神奈川県大磯町

女性議員5割超えへ

大磯町議会の歩み



大磯町議会議長 竹内 恵美子



「政界の奥座敷」大磯

大磯町は、東京都に次ぐ人口第2位の神奈川県南部、相模湾に面した気候温暖な人口3万1500人ほどの町です。首都圏への通勤圏であり、箱根や伊豆の温泉観光地へのアクセスもよく、「湘南発祥の地」とも言われ、「紺碧の海に緑の映える住みよい大磯」を町のあるべき姿として町政を進めています。歴史をひもとくと、江戸時代には、東海道五十三次の第8番目の宿場町として栄え、明治期になると、初代・陸軍軍医総監の松本順(良順)が、西洋医学における先端医療のひとつとして推奨した「海水浴場」が日本で初めて開設

されました。その後、東海道線大磯駅が開業し、初代内閣総理大臣の伊藤博文が居を構えたことから、多くの政財界人の重鎮たちが次々に住居や別荘を建築し、明治時代における「政界の奥座敷」とも言われ、避暑地、避寒地として栄えました(資料1)。その伝統は、昭和時代においても引き継がれ、第45・48・51代内閣総理大臣、吉田茂が住居を建築するなど、計8人の総理大臣が大磯町に居を構え、今なお当時の建物が現存しているものもあります。そういったことから、国による明治150周年記念事業の一環として、現存する旧邸宅一帯を「明治記念大磯邸園」と位置づけ、現

女性議員の推移

大磯町と国府町が合併し「新大磯町」町制がスタートした昭和29年(1954)12月には、女性議員はいませんでした。初めての女性議員が誕生したのは、昭和42年(1967)の選挙で、その議員はトップ当選という結果でした。以降、女性議員数は徐々に増え

改革の歩み

本議会は、町民の方々に議会運営における審議の経過や結果をわかりやすくお伝えするために、様々な先進的な取組みを積極的に進めています。平成16年(2004)、議員報酬の削減と費用弁償の廃止、議員ごとの議案賛否結果を公表、ケーブ

在、国が事業を進めています。令和3年(2021)度により一部公開され、令和7年(2025)度の全面公開に向け、整備が着々と進められています。当町のみならず、神奈川県の大磯町目玉として、大きな期待が寄せられています。

続け、昭和58年(1983)は10%を超え、平成3年(1991)は25%、そして平成15年(2003)には50%となり、以降、50%以上が継続されています(資料2)。なお、女性議長は昭和60年(1985)に誕生して以降、6人が就任、副議長は8人就任し、現在は、女性の私が議長になっています。



資料3 オンライン議会報告会の模様

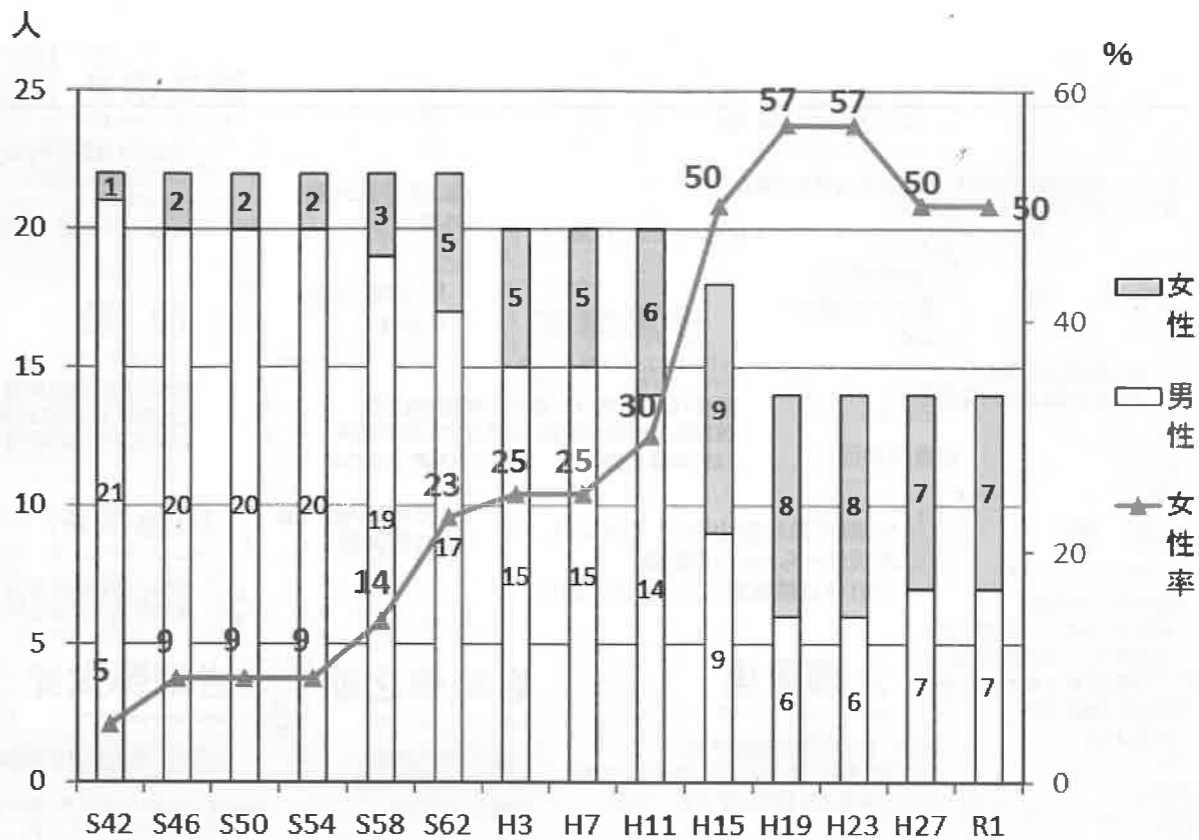
と、多くは女性が中心となって活動し、その中から議員選挙に挑戦し、続々と議員が生まれていったと考えられています。
ちなみに、私が議員に立候補したきっかけは、突然の出来事からでした。
結婚前まで町役場に勤めていたこと、子育てが一段落したこともあり、教育委員会の社会教育指導員として、また、保険年金課のレセプト点検員として、町役場で働いていました。

美ちゃん、議員にならないか」とお誘いを受けました。
最初は「まさか自分が……」とは思いましたが、町議会を傍聴していくうちに、「町民のためには私にもできることがあるのではないか」との思いが増していきまし。そして、選挙まであと1か月しかないというときでしたが、町会議員に無謀にもチャレンジすることを決断しました。
その頃は、地方自治が叫ばれると同時に、「地方の自立」が求められていましたので、「すべての利権や権力と与しない」「群れない」町民派として立候補し、町民の温かい支援を受けて、当選させていただきました。
それは、平成15年(2003)、女性候補者10人中9人が当選、そのうち私も含めて4人が新人で、女性議員数50%以上がスタートしたときでもありません。
このように、実際、ひとたび立候補すれば、市民活動によるネットワークの強みを活かして選挙にも強く、立候補した女性候補の当選率は極めて高い率を維持しています。
また、当町議会の特徴の一つとして、以前から男女が同等に在籍していることもあり、「男性だけ

ら」「女性だから」という意識が薄いだけでなく、一期生議員やベテラン議員であっても、互いに臆することなく、言いたいことが言える雰囲気があります。
巷で聞かれるような、新人議員の目立つ言動に対して、ベテラン議員からの妙な？ 圧力、例えば先輩議員が新人議員を一室に呼び出して叱責するような状況はありません。
例年開催している議会報告会をコロナ対策として、オンラインを導入したのも、若い一期生議員たちの提案によるものでした。
さらに、常任委員会や特別委員会の役職は、ある程度経験を経てからという考え方もありますが、実際、一期生議員であっても、常任委員会の委員長・副委員長に推選されるなど、経験年数にかかわらず、積極的に活動をしています。

結び

当たり前のことながら、議員である前に一人の人間として差別をしない、「男性」「女性」と区別する感覚がなくなることが最も自然なことではないかと思えます。
したがって、一般的に言われるように、男性と女性は半々が望ましいということすら、私たち議会には意識としてないのかもしれない。
旧来の男性と女性という意識が薄いことが、自由な発言、自由な行動、それが性別による垣根やハードルがなく、だれでも志がある町民であれば、議員に挑戦し、議員となり、一期生であっても臆することなく発言、行動し活動できることにつながっているのだと思えます。
私たち議員にとって最も大切にしなければならぬことは、私たちは選挙で「町民に選ばれた議員」であること、それを踏まえ各議員がお互いに尊重し合って議員活動をするのではないでしようか。
「男だから、女性だから」「一期目だから、ベテランだから」「若いから、年長者だから」に関係なく、「町民に選ばれた議員」として、誰であっても、議員の意見は町民の意見であることを意識し、尊重し合うこと、これが基本姿勢だと思っています。
自治体の発展のために男女に係なく議論し合うこと、これは当たり前前のことです。
一日も早く、このような特集記事が不要となる日が来ることを切に願っています。



資料2 大磯町議会の女性議員数推移

視点から、改革の目を光らせているため、さまざまな改革を進めることができたのだろうと思います。
そのような改革に努めたことから、平成20年(2008)、全国町村議会議長会より議会活性化表彰を受賞、また、平成22年(2010)、早稲田大学マニフェスト研究所「議会改革度調査」では全国5位、町村部門1位を、平成28年(2016)には全国町村議会議長会より「特別表彰」を受賞しました。
その後、当町議会に多くの市町村議会の方々が続々と視察に訪れています。
女性議員増加のための施策？
今回与えられたテーマは「女性議員5割超え」というものです。
当議会は平成15年(2003)度以降、男女比50%を維持していることから、「どのような努力をしてきたのですか?」「その要因はなんですか?」といった問い合わせや取材を受けることが多くあります。
そのとき、いつも、どうして女性議員が多いのか? 特にこれといった理由を見出し、明確な回答をすることが難しいのが正直なところです。

それは、あえて議会として、また町行政として、女性議員を増やすために特別な施策をしていたという認識がないからです。
思い当たることとして、あえて申し上げるとするならば、以前から、自然保護・環境保全、開発問題、民間企業研究所の建設構想など、特に1990年代に多数わき起こったマンション開発等への反対運動など、女性が積極的に参画していたことが挙げられます。
というのは、冒頭で大磯町の変遷について述べさせていただきましたが、政財界人の住居や別荘が多く建設され、時代の趨勢とともに企業等に売却、保養所などで活用・保全されていたものが、バブル期やその後のバブル崩壊に伴い、さらに不動産業者や開発業者などに売却されて行きました。
そして、歴史的建造物の解体・撤去、大規模敷地の分割・分譲、管理された良好な屋敷林や自然林の伐採など……。
大磯町にとって、決して小さいとは言えない自然環境への影響も含めて、それらに対する市民活動が活発に行われてきました。
そういった活動の中で、「大磯を自然破壊から守りたい」、「大磯の歴史・文化・自然を守りたい」